

子牛の下痢症の診断および治療 についての全国アンケート

家畜感染症学会事務局
(作成責任:大塚浩通)

北里大学獣医学部大動物臨床学教室
〒034-8628 青森県十和田市東二十三番町35-1
TEL: 0176-23-4371 (代表)
FAX: 0176-23-8703
E-mail: otsuka@vmas.kitasato-u.ac.jp

[目的]

子牛の下痢に遭遇する獣医師の下痢症に対する認識を調査し、病気の発生に対する治療や予防対策に繋げる情報の整理を目的に本アンケートを実施した。

[方法]

回答人数: 329人

実査期間: 2月27日(木)から4月26日(土)

調査内容(設問数): 診断－6

治療－14(うち小問が6)

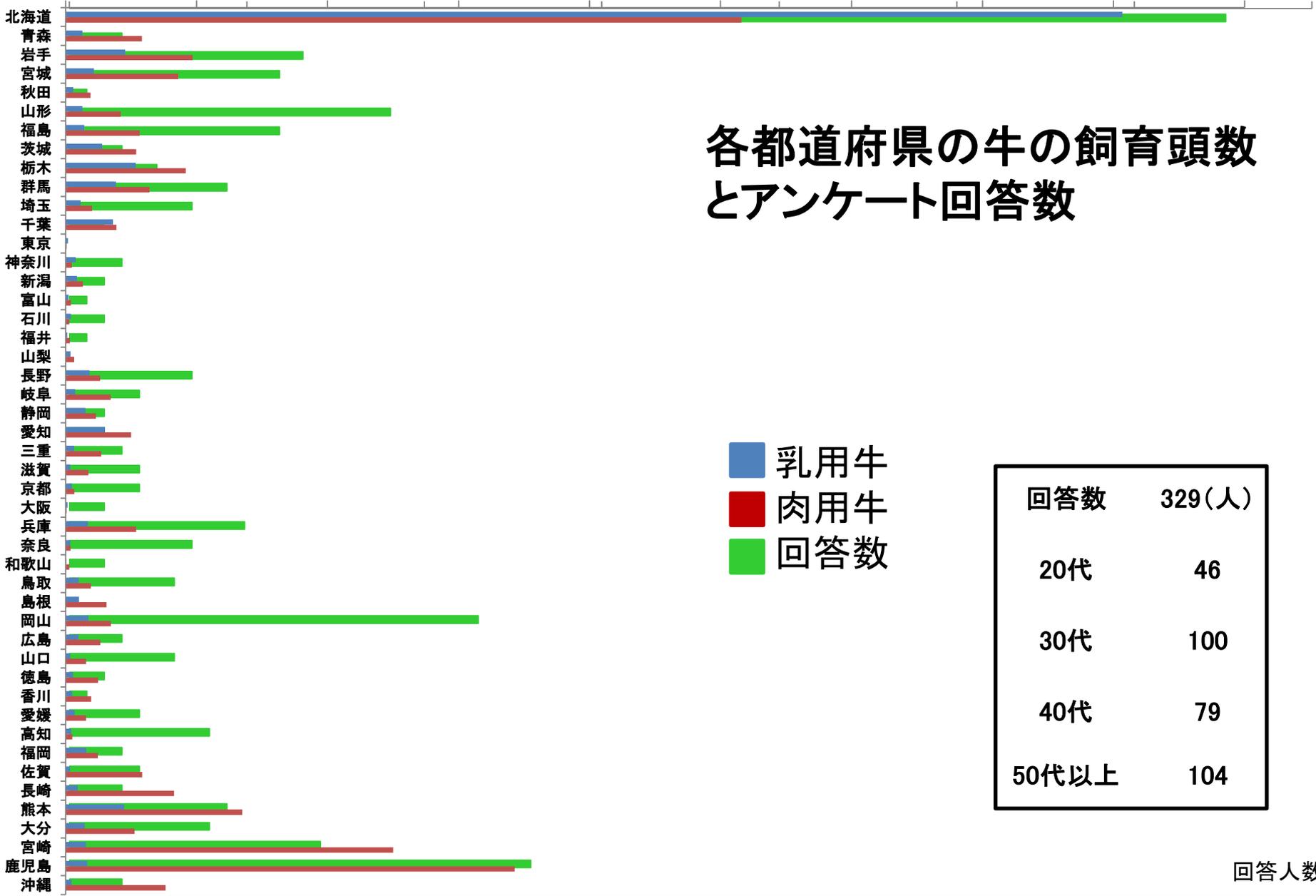
衛生・予防－8(うち小問が2)

虚弱子牛－5

その他－3

頭数

0 100,000 200,000 300,000 400,000 500,000 600,000 700,000 800,000 900,000



各都道府県の牛の飼育頭数 とアンケート回答数

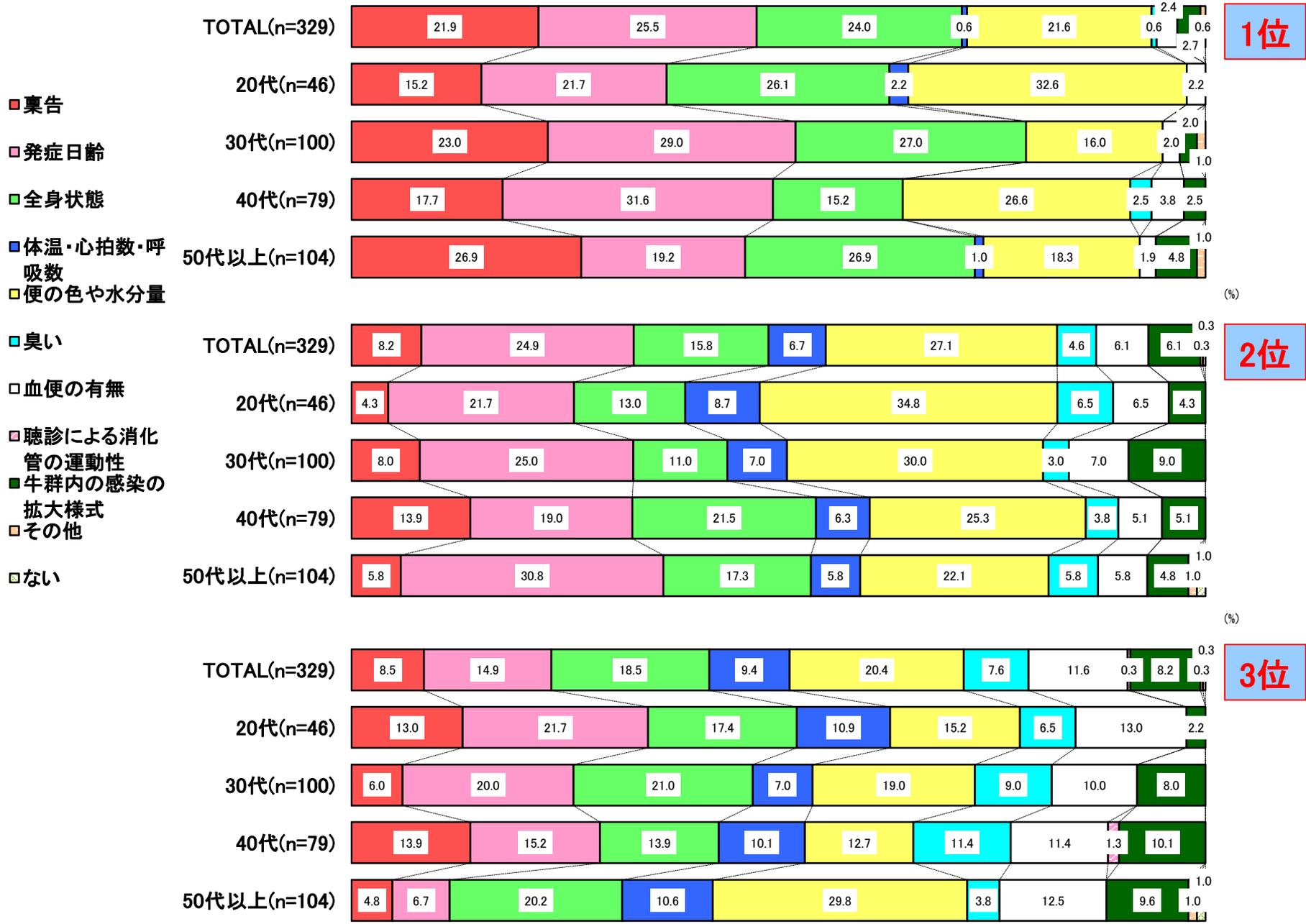
■ 乳用牛
■ 肉用牛
■ 回答数

回答数	329(人)
20代	46
30代	100
40代	79
50代以上	104

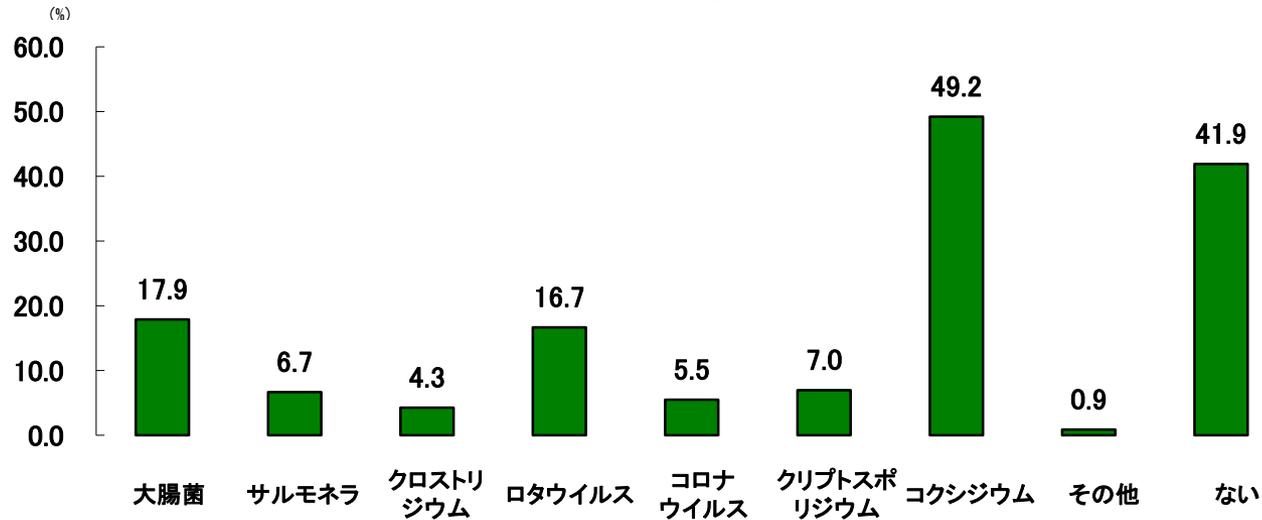
回答人数

0 10 20 30 40 50 60 70

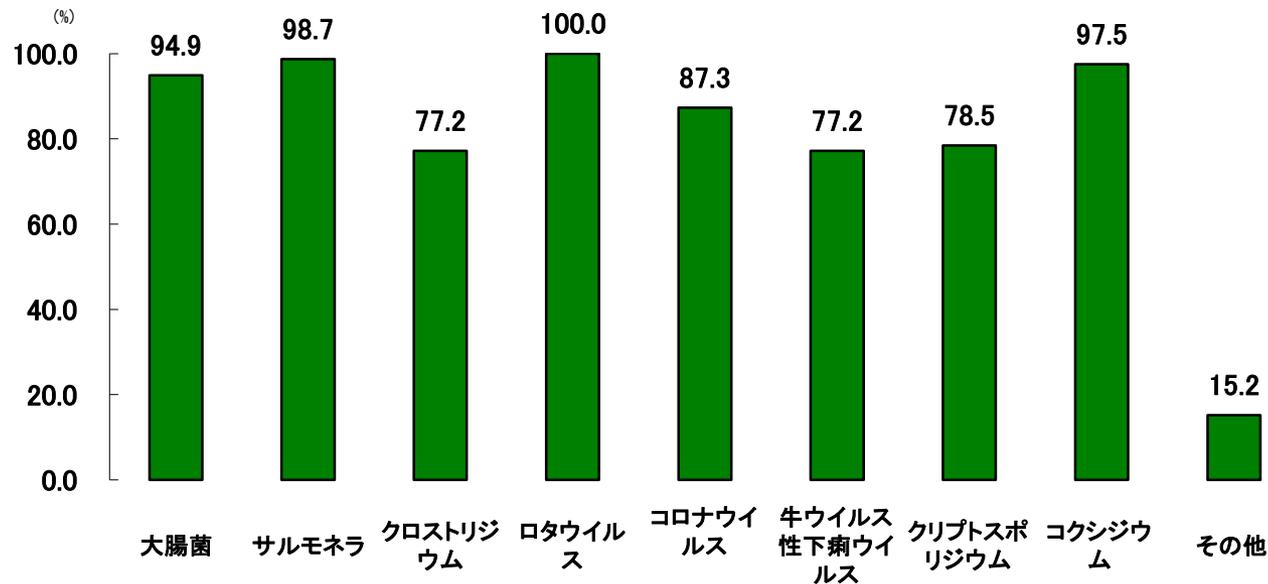
Q1-1 下痢の発症要因の鑑別で目安としているものは何ですか。



Q1-2 以下の病原微生物の感染による下痢症のうち、臨床症状のみにて診断出来るものはありますか。

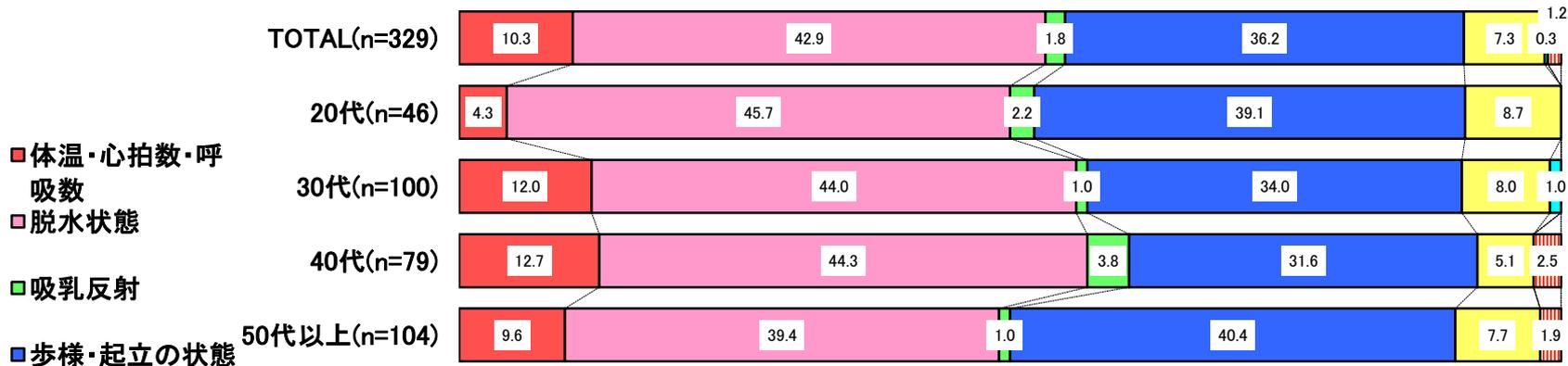


Q1-3 次の子牛下痢症のうち、病性鑑定において検査をする病原体はどれですか(家畜保健衛生所の先生のみ)。

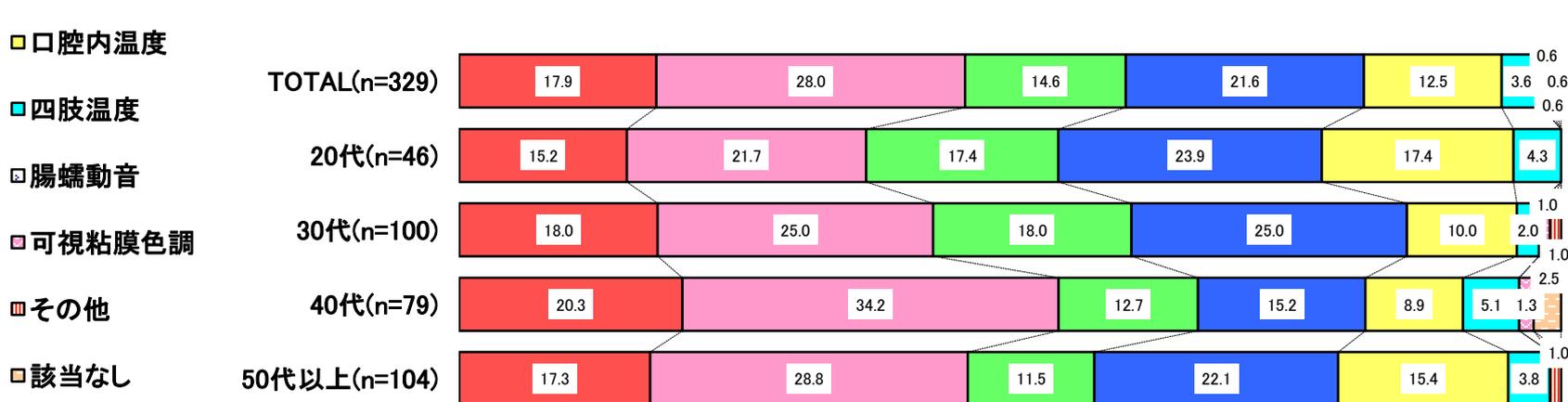


Q1-4 重症度の評価のための目安としているものは何ですか。

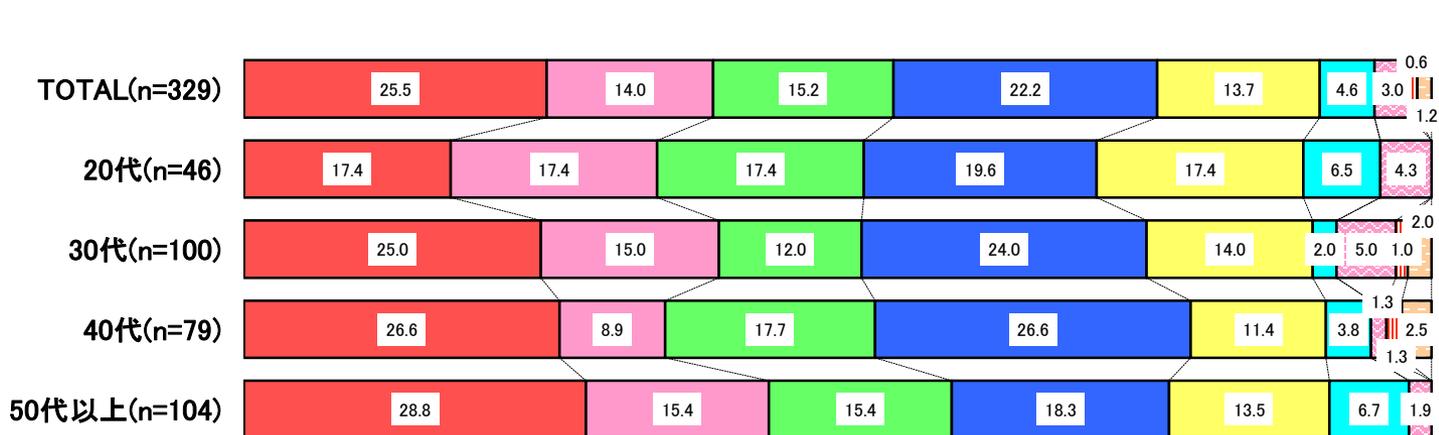
(%)



1位

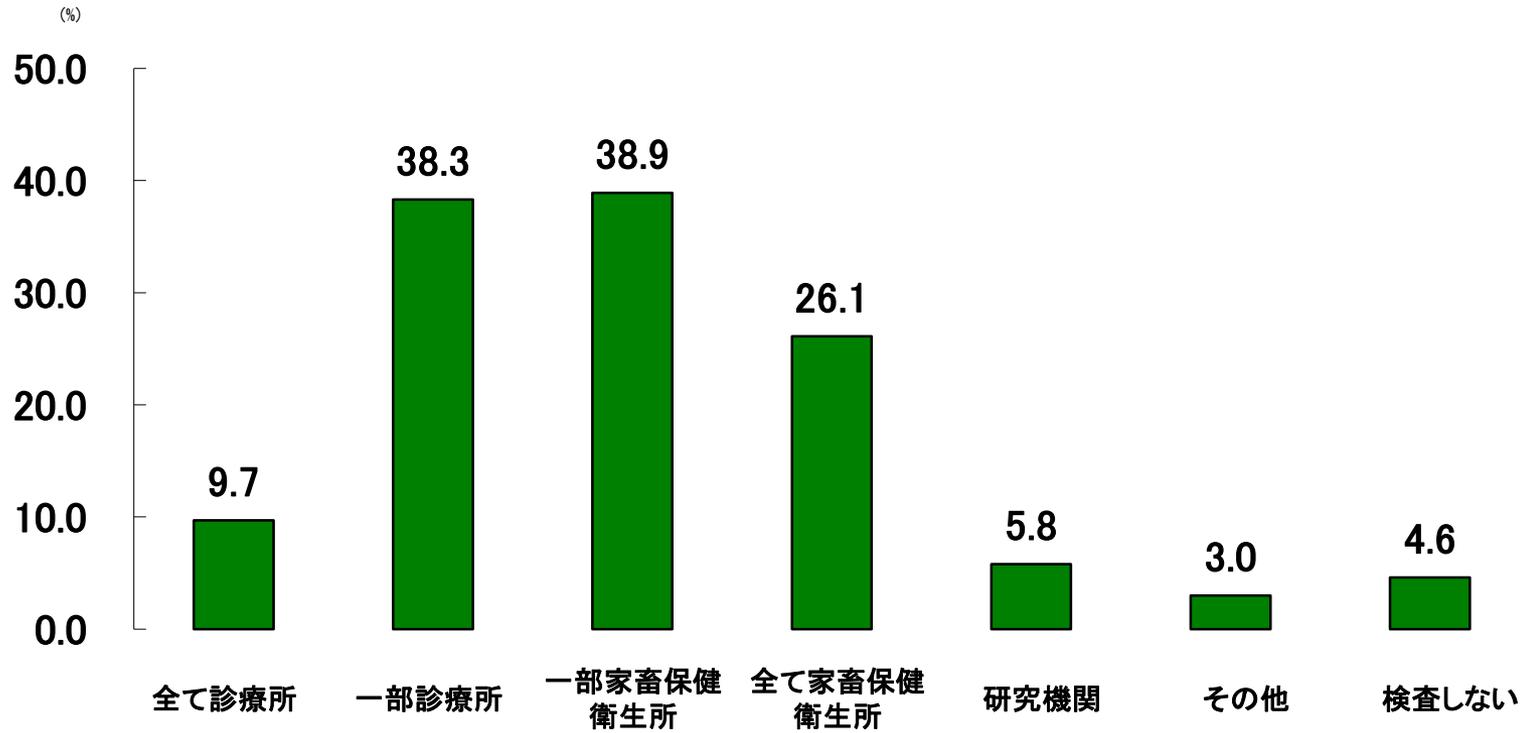


2位

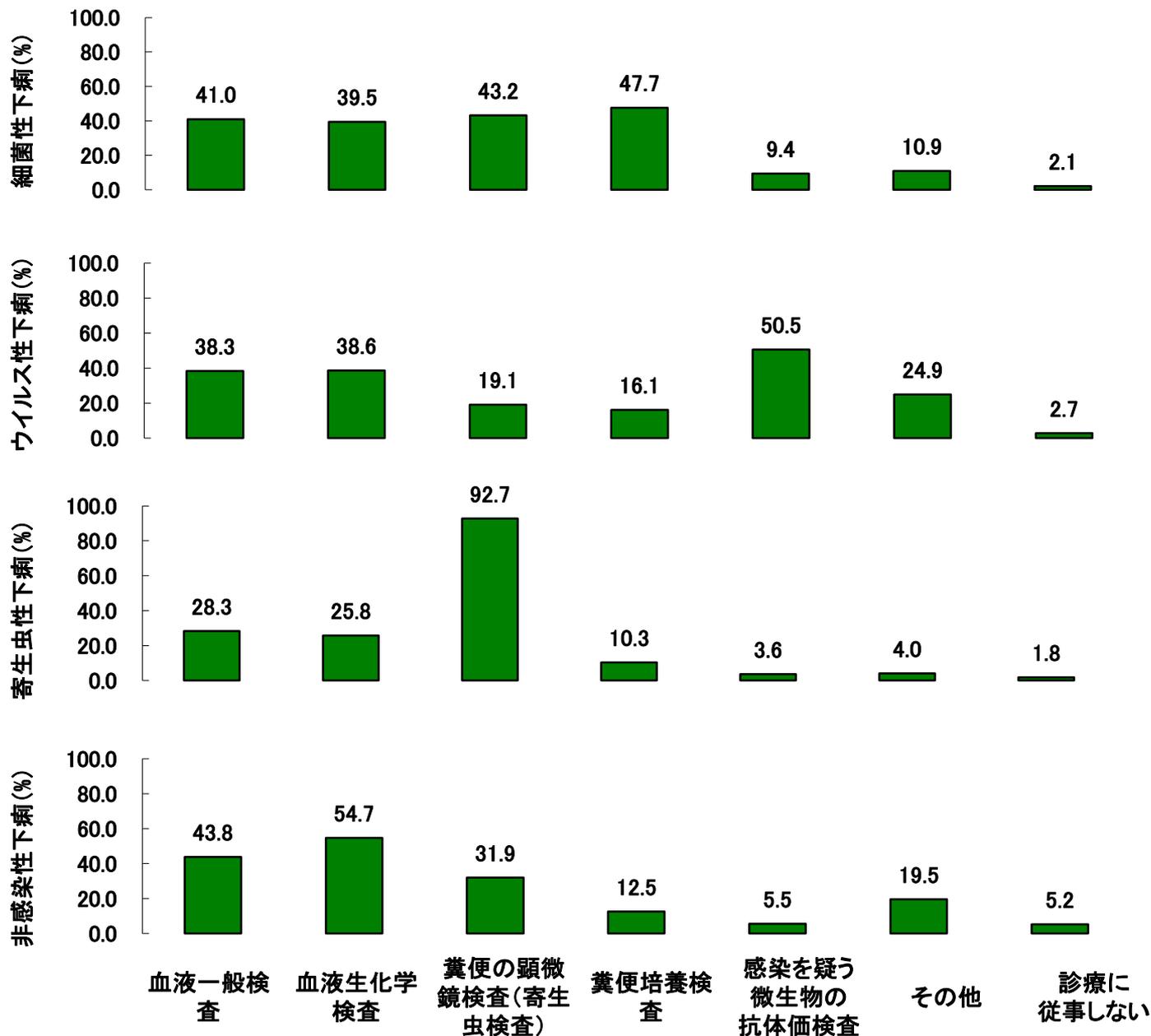


3位

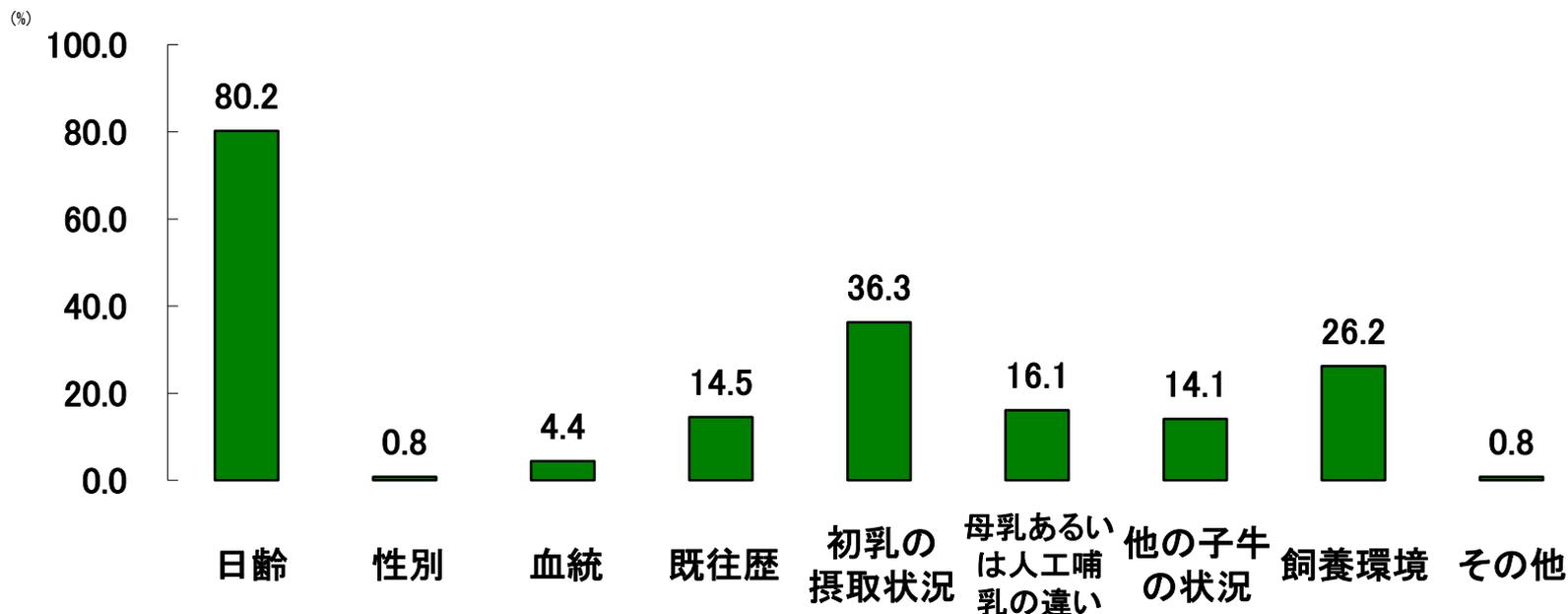
Q1-5 子牛の下痢症に対する原因病原微生物の検査はどうしていますか。



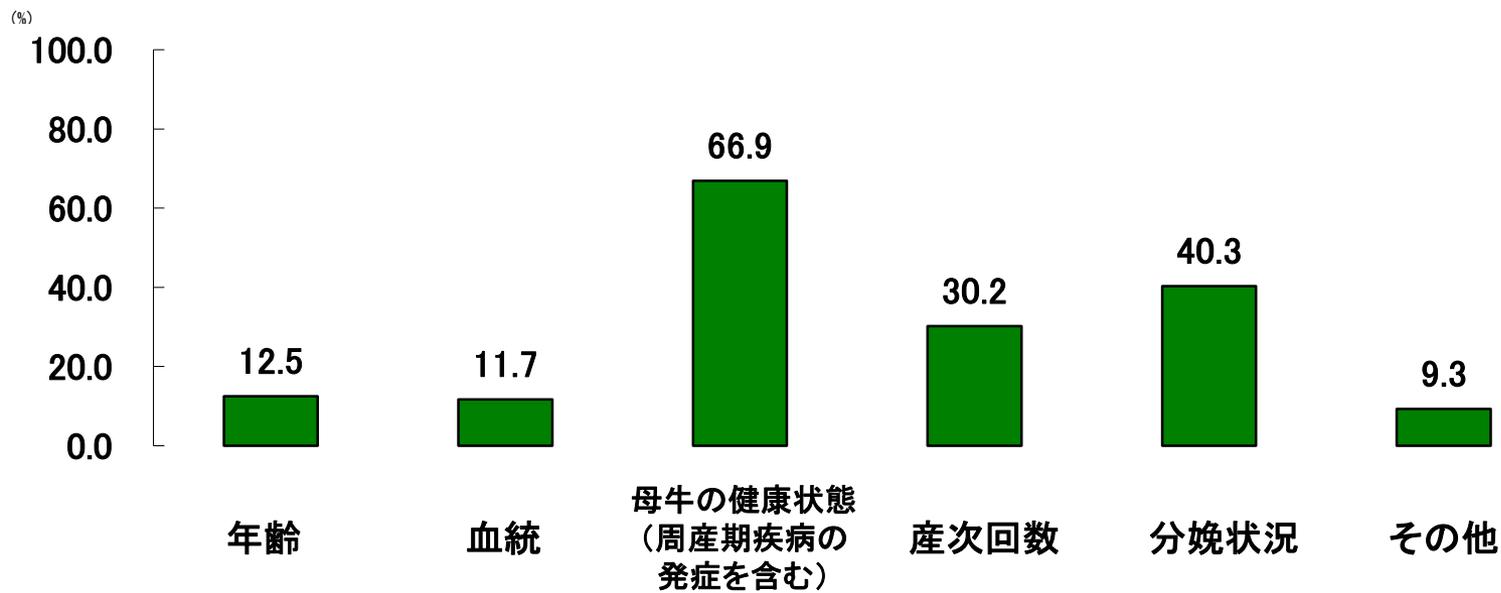
Q1-6 子牛の各下痢症において臨床診断以外の検査が必要と判断した場合に実施する検査項目はどれですか。



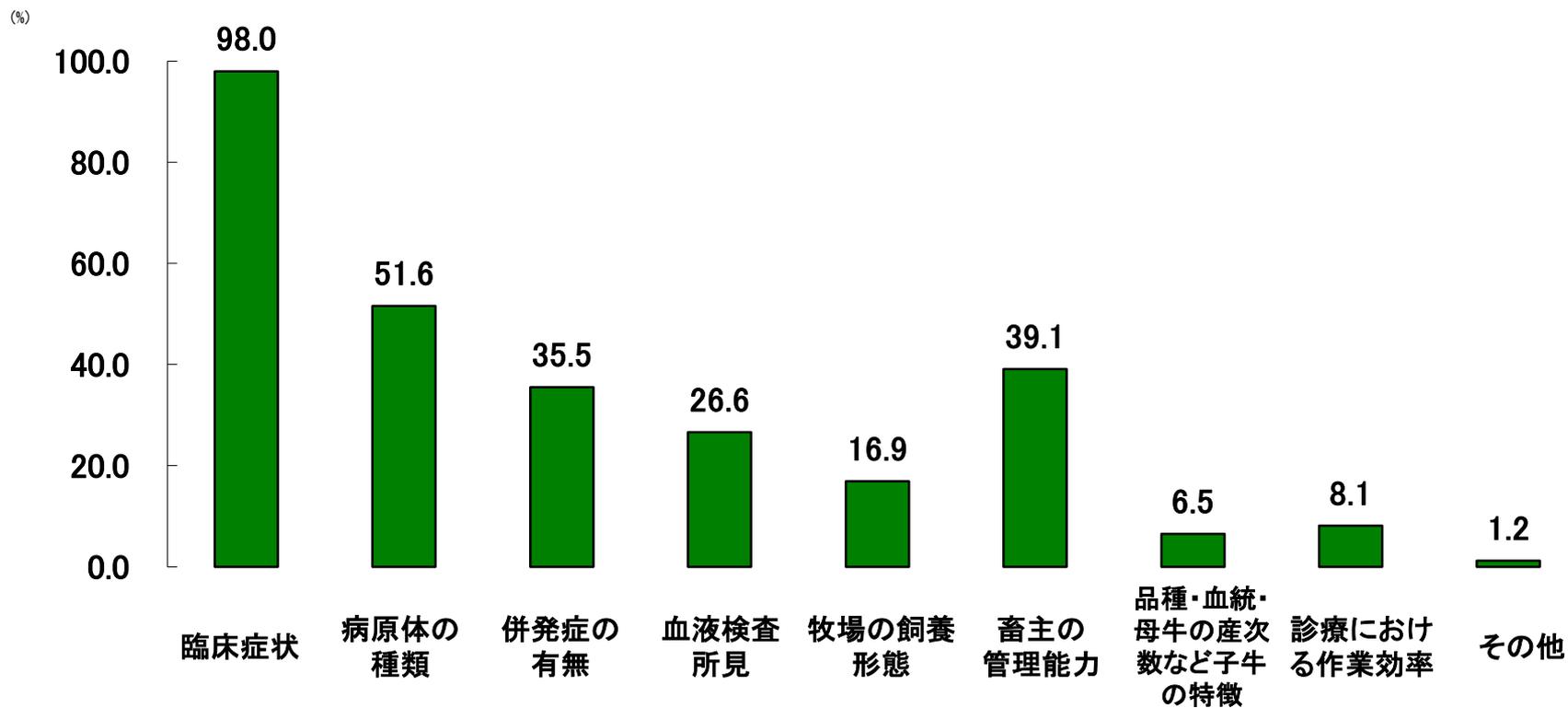
Q2-1 治療法を選択する際に、重視する子牛の個体情報は何か。



Q2-1 治療法を選択する際に、重視する母牛の個体情報は何か。



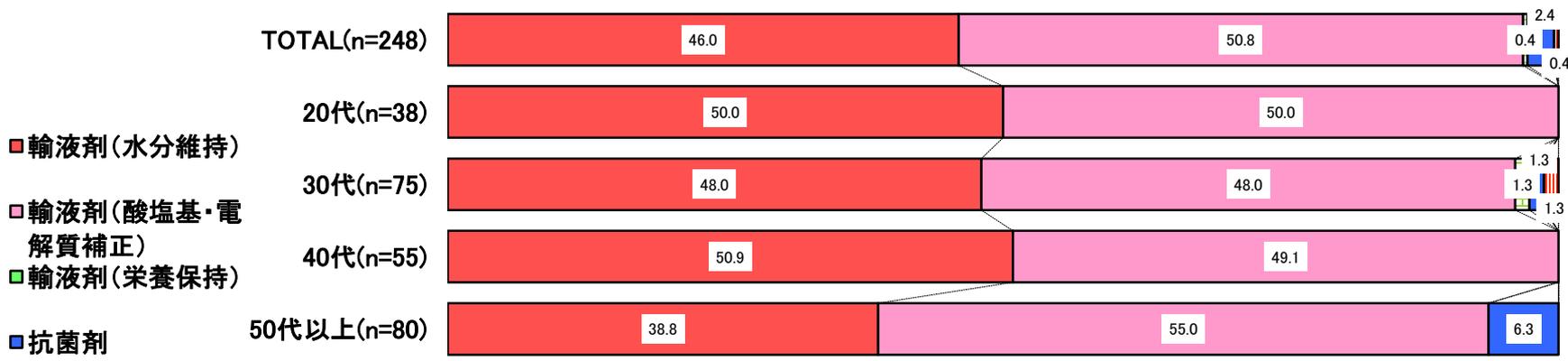
Q2-2 治療方針の選択において重視するものは何ですか。



Q2-3 重症の子牛の下痢症の治療において優先する治療薬はどれですか。

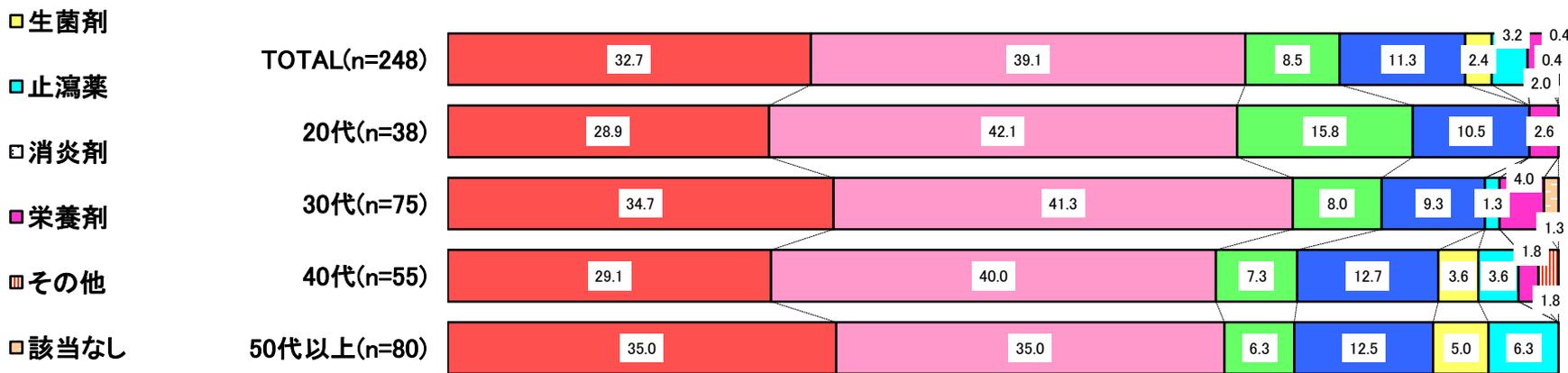
(%)

1位



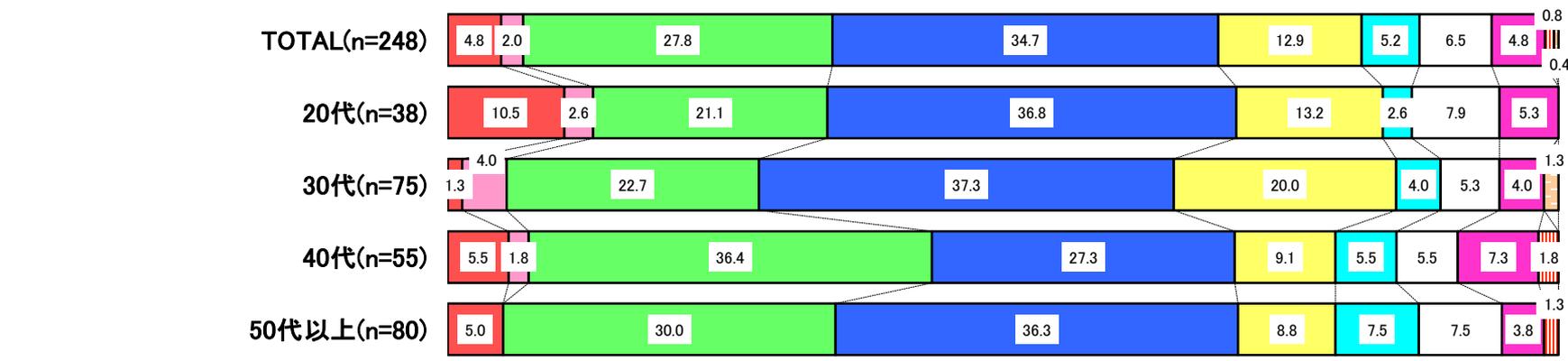
(%)

2位



(%)

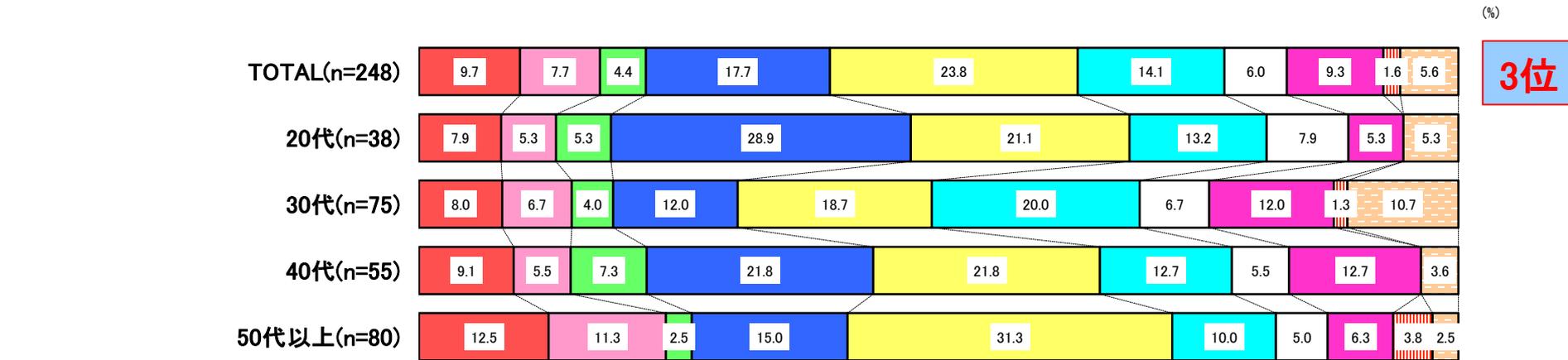
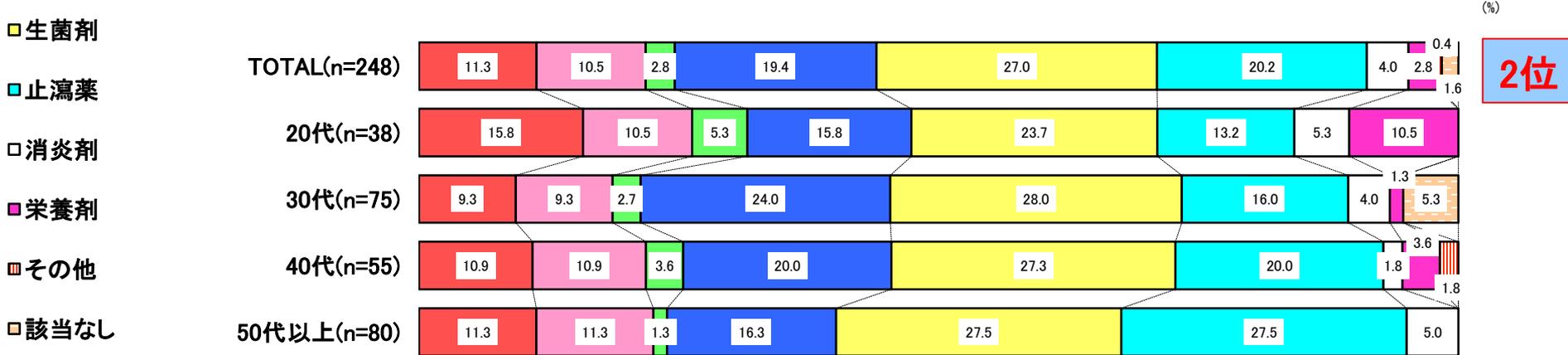
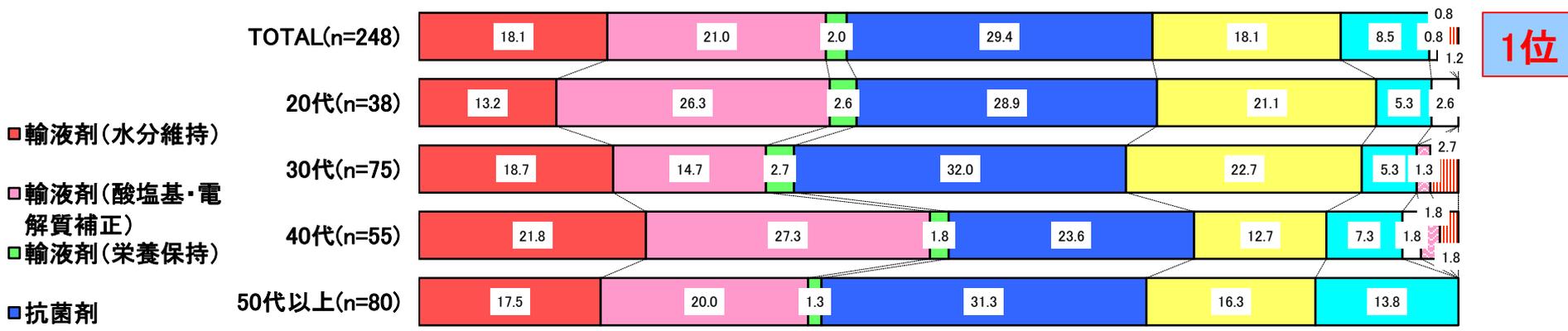
3位



(%)

Q2-3 軽症の子牛の下痢症の治療において優先する治療薬はどれですか

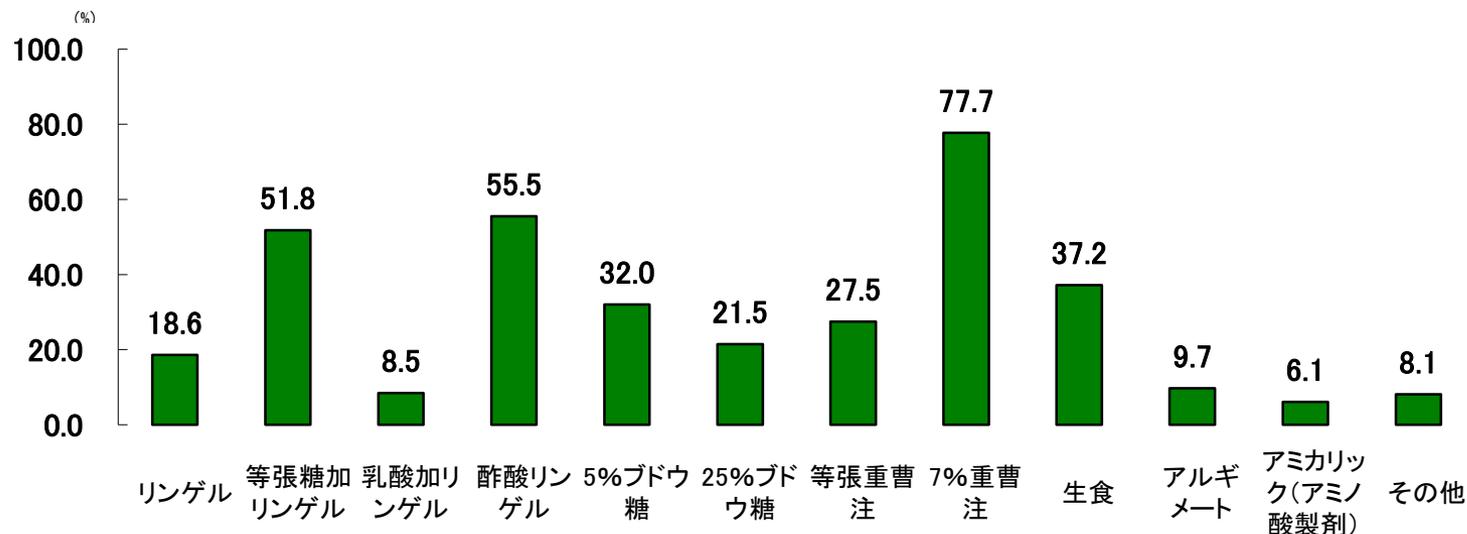
(%)



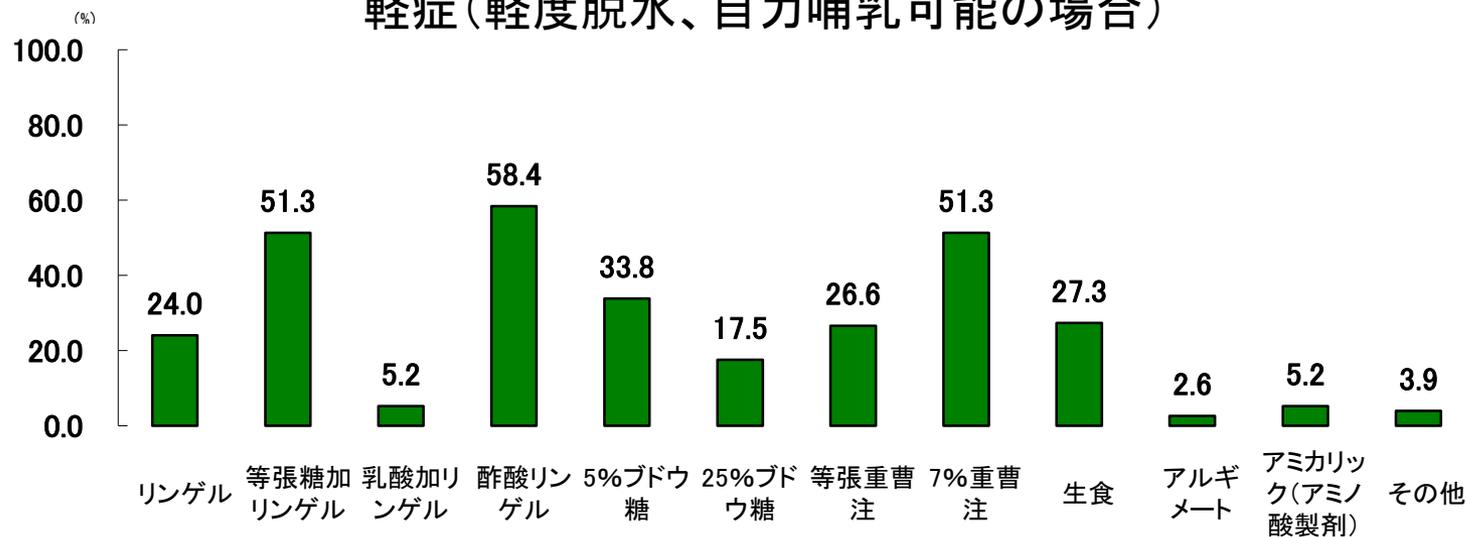
(%)

Q2-4 下痢症での体液補正の治療において使用することの多い輸液剤はどれですか。

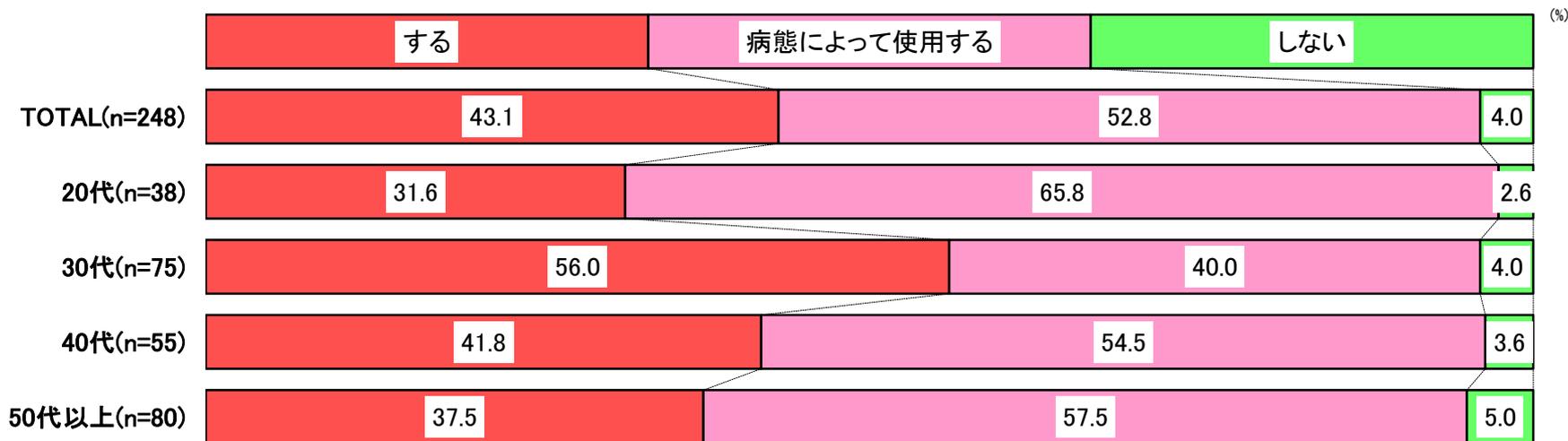
重症（重度脱水、自力哺乳不可能の場合）



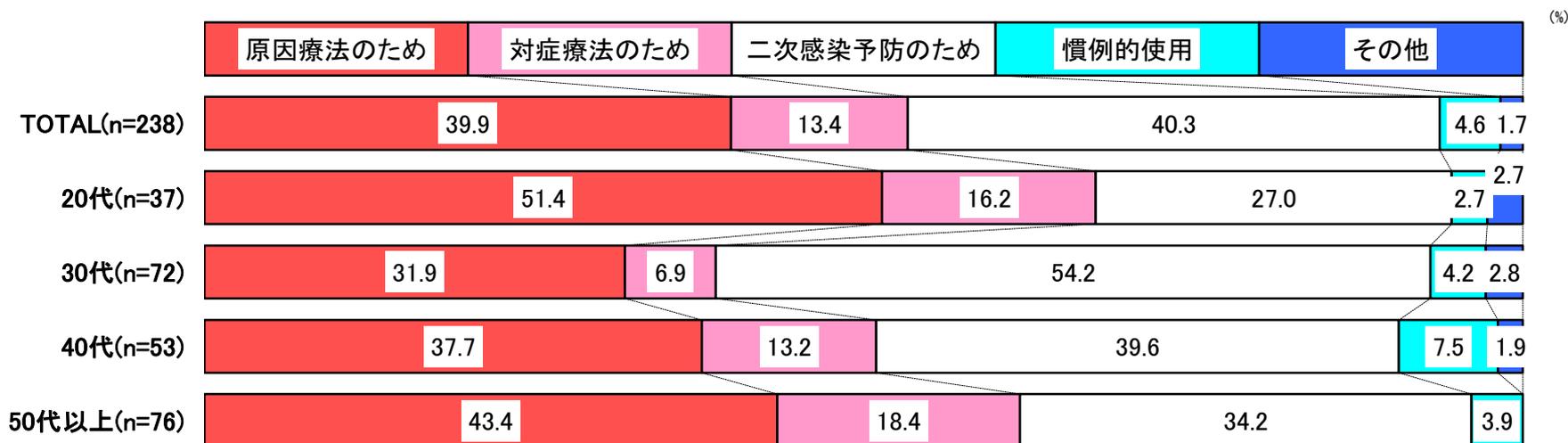
軽症（軽度脱水、自力哺乳可能な場合）



Q2-7-1 病原微生物の種類に関係なく、子牛の下痢症の治療に抗菌薬を使用しますか。

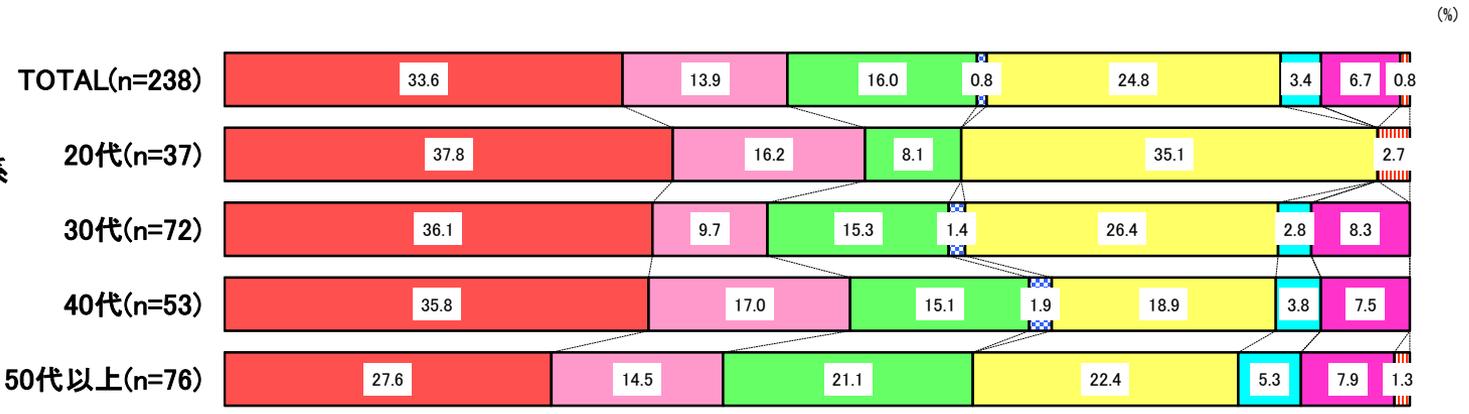


Q2-7-2 抗菌薬の主な使用目的は何ですか。

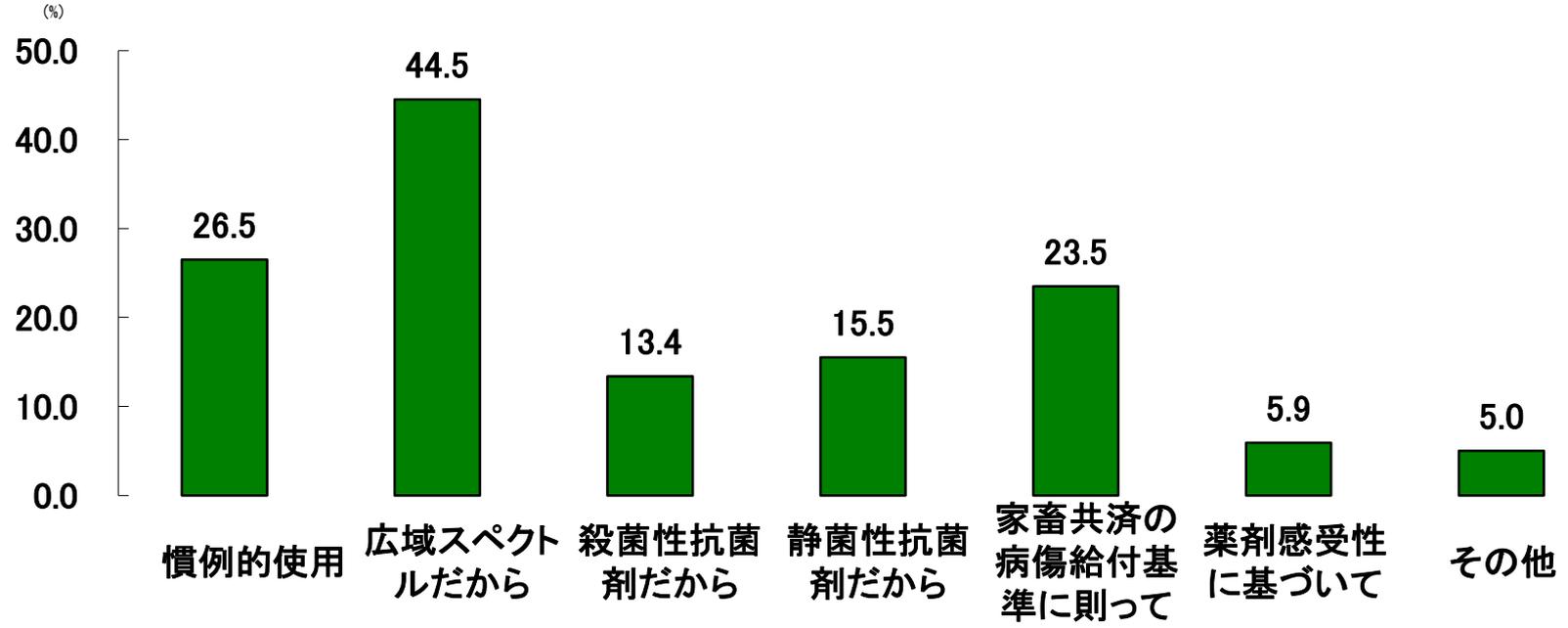


Q2-7-3 第一選択薬で最もよく使用する抗菌薬は何ですか。

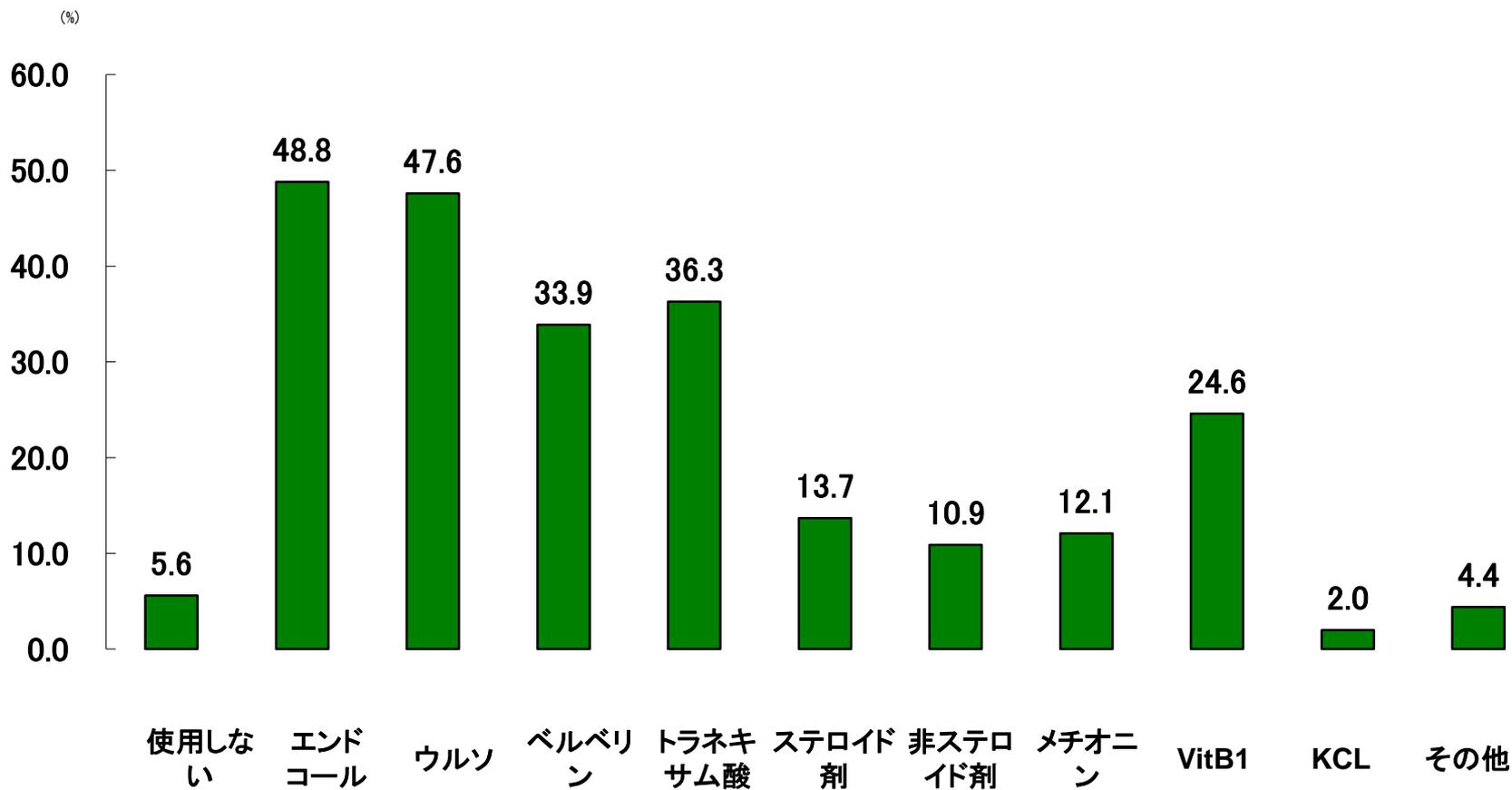
- ペニシリン系
- セフェム系
- アミノグリコシド系
- マクロライド系
- テトラサイクリン系
- フルオロキノロン系
- フェニコール系
- サルファ剤
- その他



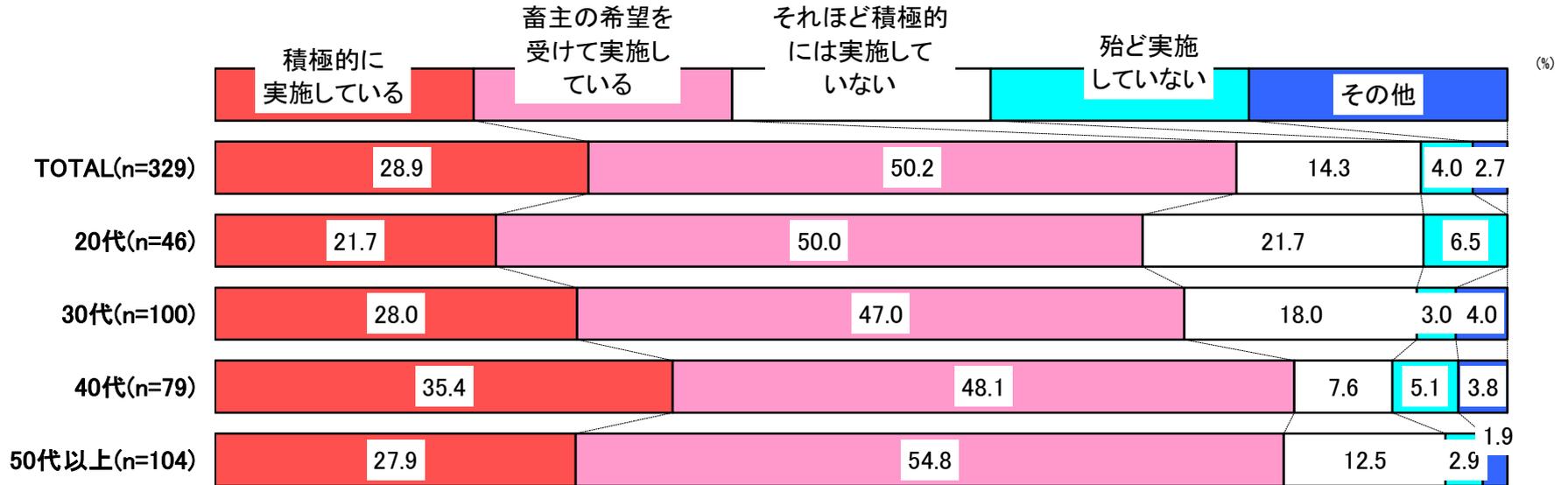
Q2-7-4 前問で選択した抗菌薬の選択理由は何ですか。



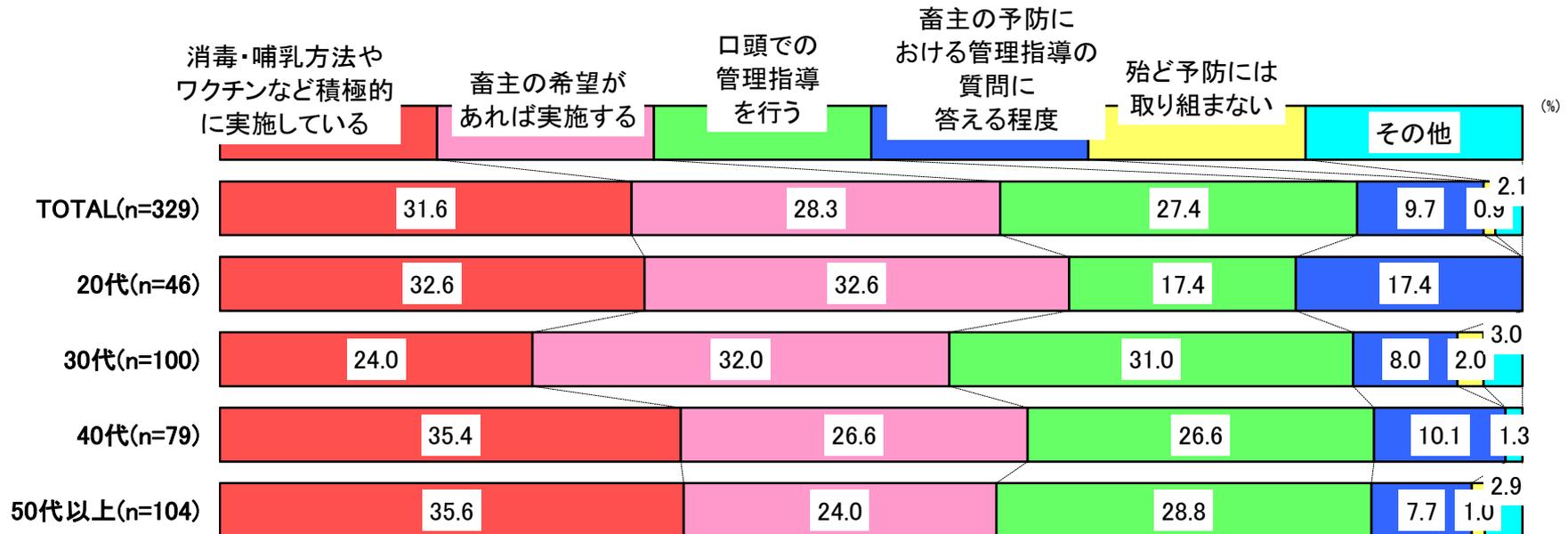
Q2-8 下記の薬剤で、子牛の下痢症によく使用するものは何ですか。



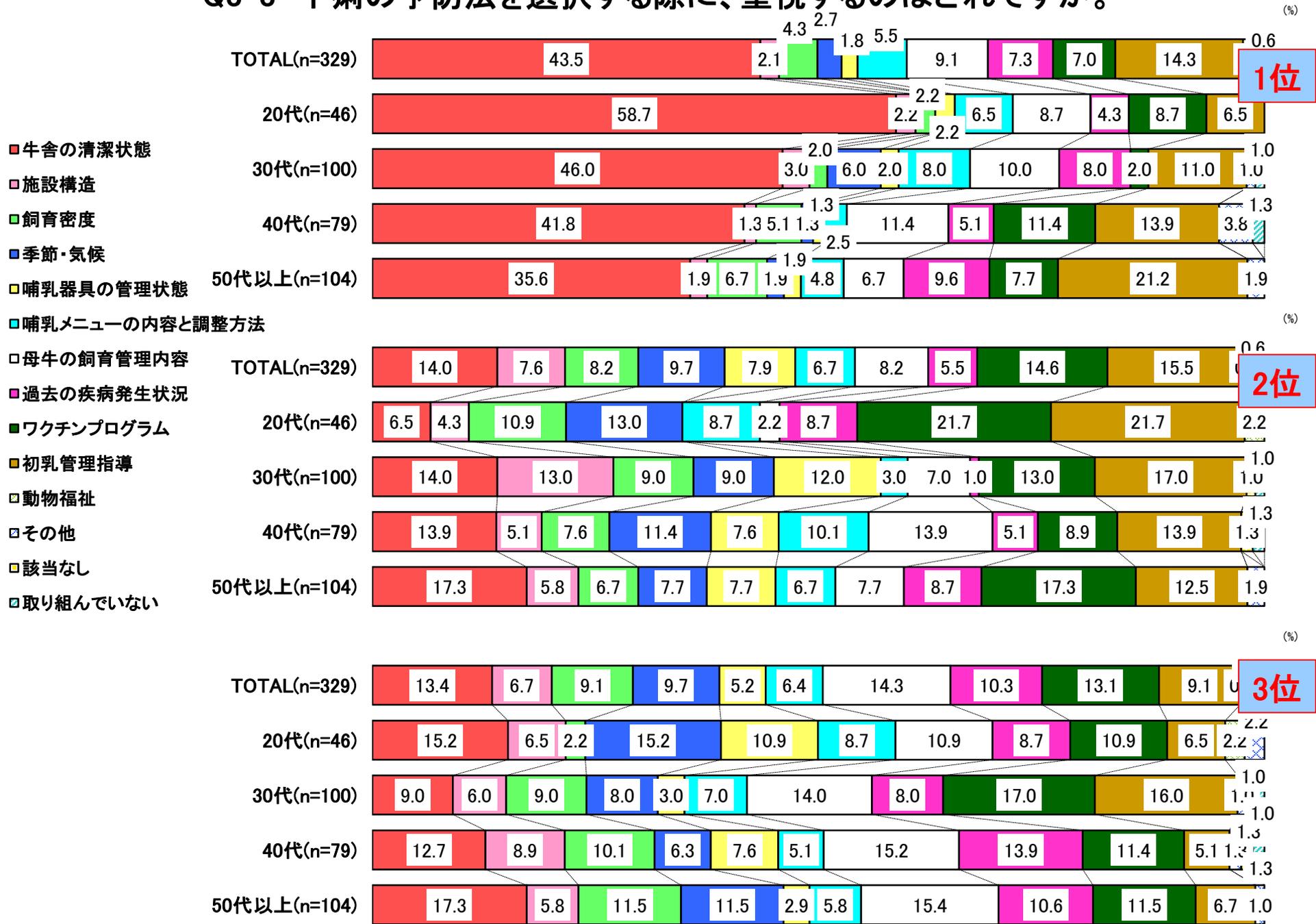
Q3-1 子牛の下痢予防対策を実践していますか



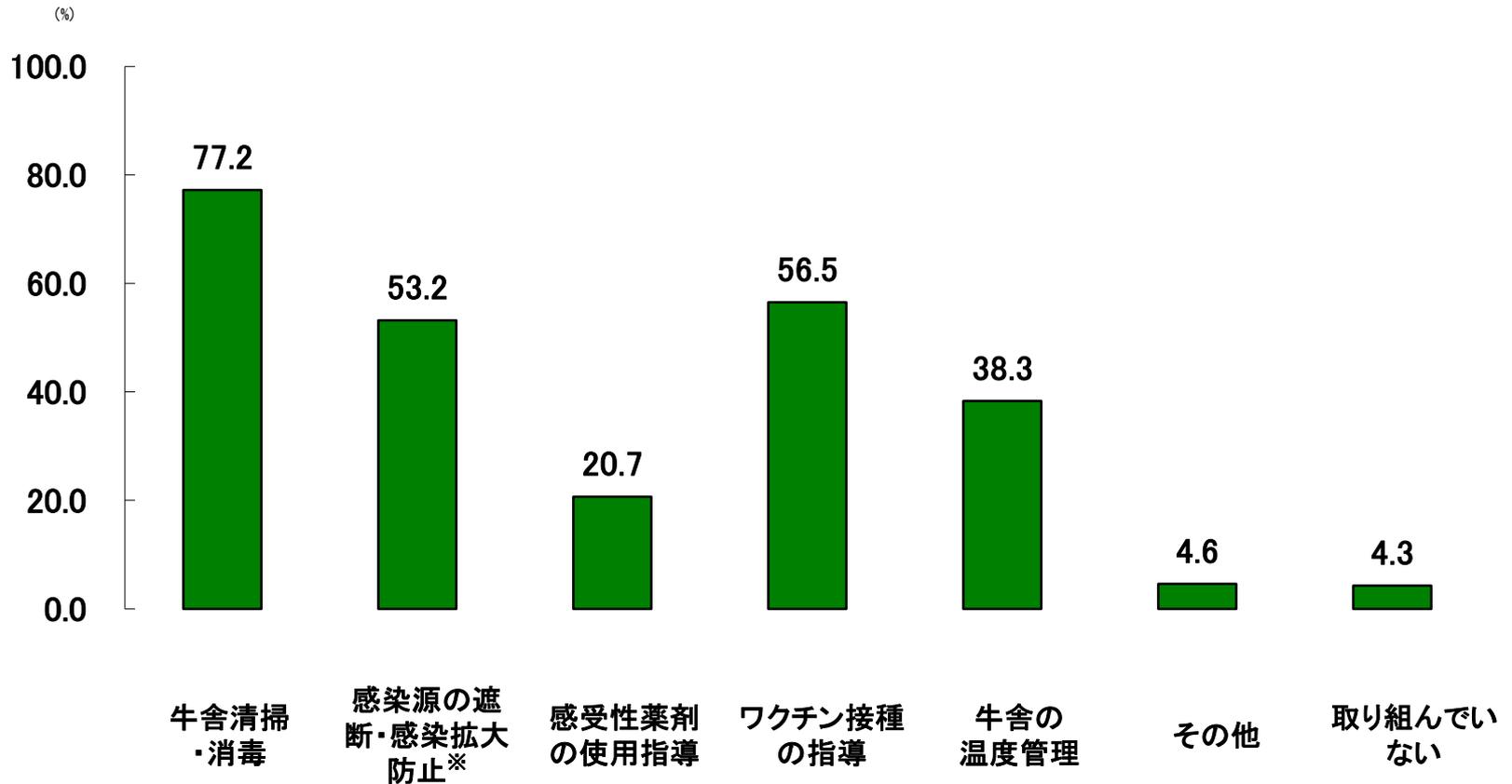
Q3-2 下痢症の予防についてどの程度取り組んでいますか。



Q3-3 下痢の予防法を選択する際に、重視するのはどれですか。

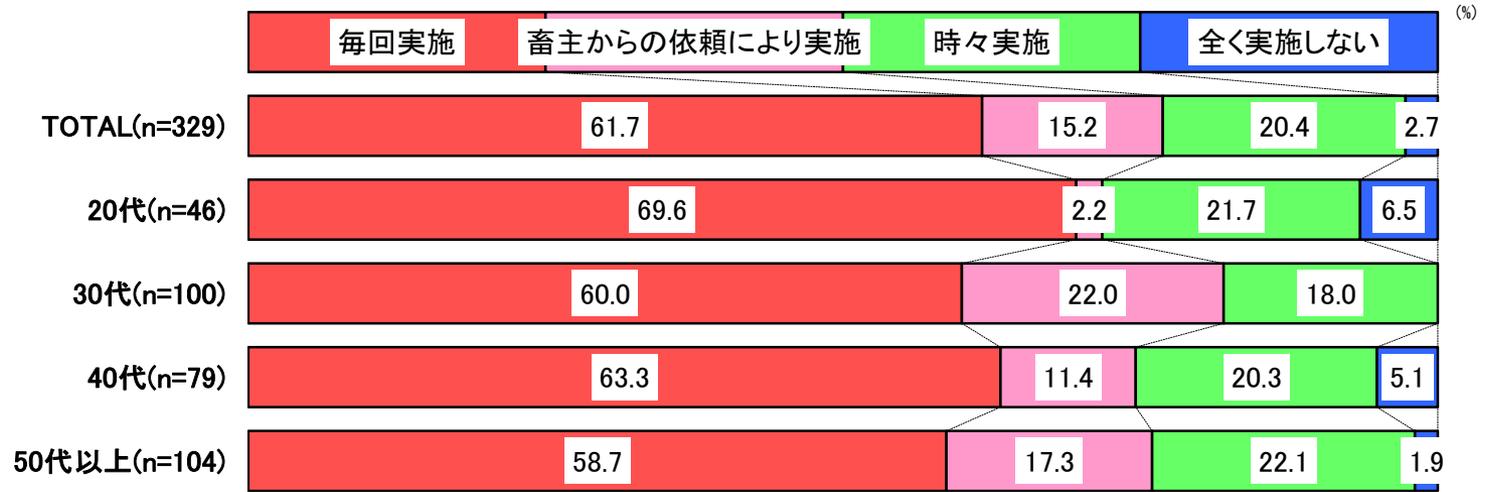


Q3-4 下痢症発生後の防疫対応として取り組んでいることは何ですか。

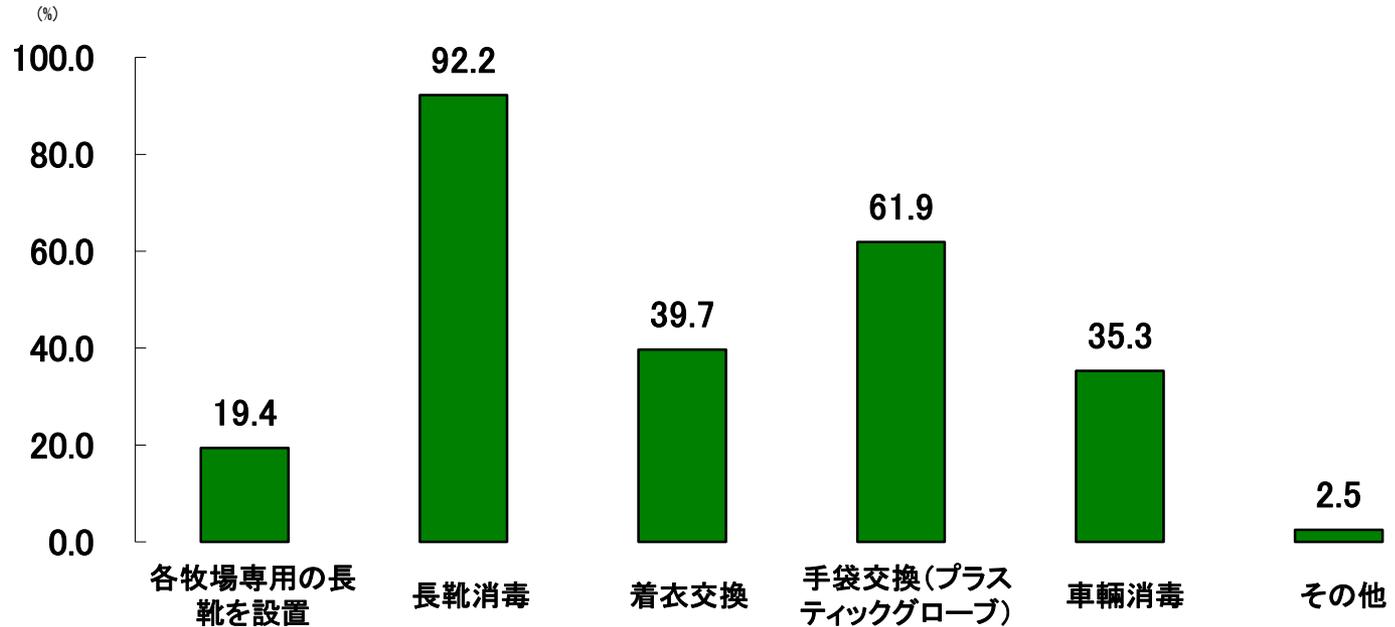


※患畜の隔離、感染源と考えられる導入牛・成牛との接触防止、踏み込み消毒…等)

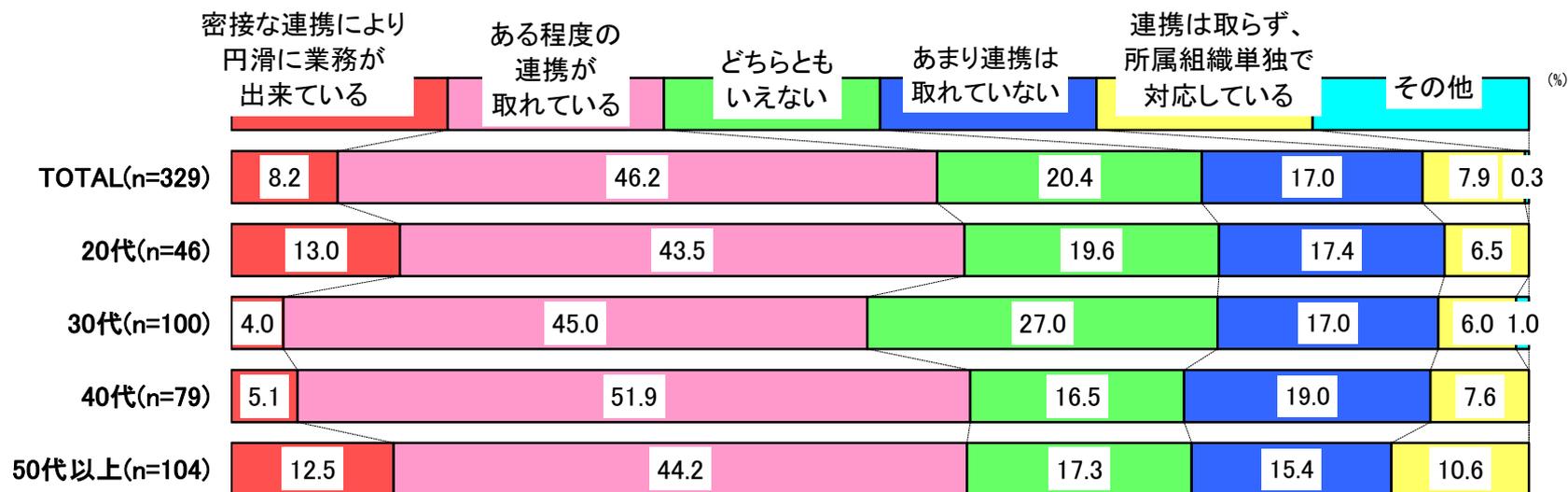
Q3-5-1 日常業務で牧場内に訪問する際に衛生対策の取り組みはどうされていますか。



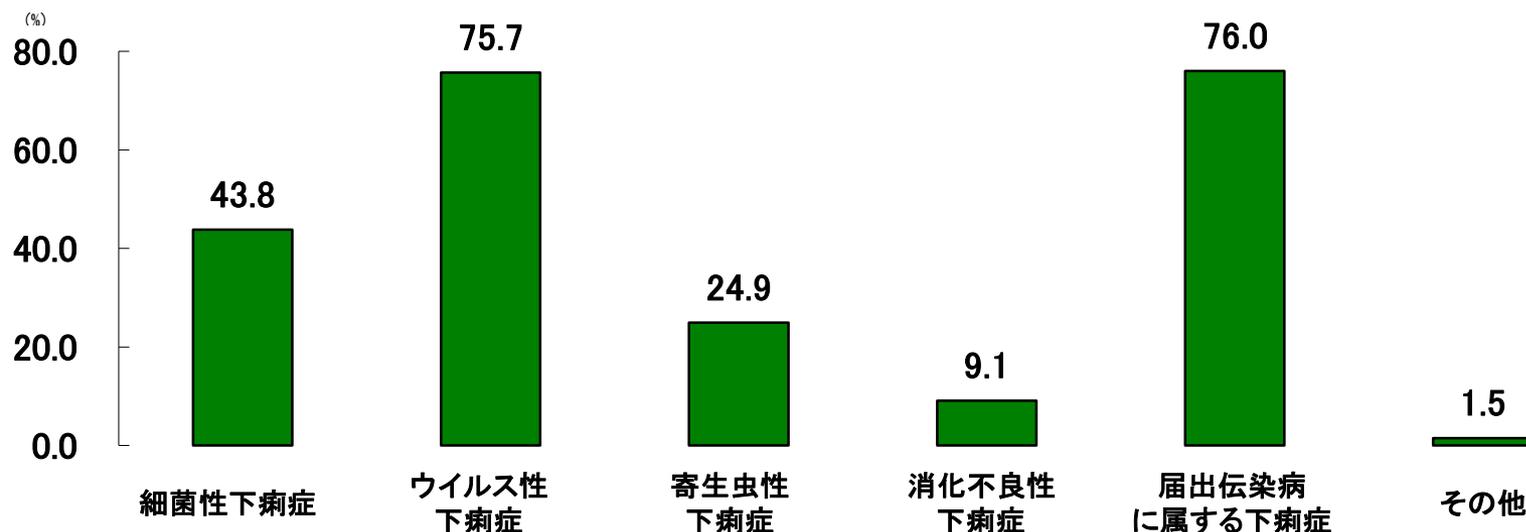
Q3-5-2 該当する衛生対策の具体的な実施項目はどれですか。



Q4-1 日常業務において牧場における子牛の下痢対策のための各組織間(NOSAI、家畜保健衛生所、その他)の業務の役割分担や情報交換は円滑に実施されていますか。



Q4-2 子牛の下痢対策において所属組織以外の獣医師との連携が必要と考えるものはどれですか。



下痢症の診断において

- ・臨床所見のみでの診断は病原因としてコクシジウムは50%程度診であり、40%程度の下痢症は診断が難しいと考えられている。
- ・確定診断のための検査の実施割合はコクシジウムで90%以上であるが、それ以外は50に満たない。
→確定診断しなくても治療成果が得られている?

治療において

- ・治療の大半は輸液剤が選択されており、脱水の補正や酸塩基平衡の改善に主眼が置かれている。
- ・抗菌剤が輸液剤の次に選択される割合が高く、次に生菌剤、止瀉薬の使用割合も高い。
→細菌性下痢症の診断率よりも抗菌剤使用の割合が高く、抗菌剤が常用されている可能性がある

下痢症の予防対策では、

- ・80%近くの獣医師が予防対策を実施している。
 - ・予防において重視されるのは、施設の衛生、ワクチネーション、初乳管理だが、回答には選択幅が多く、獣医師個々に様々なとらえ方が有る。
 - ・取り組んでいるのは牛舎の消毒やワクチネーションの回答が多い。
- ➡伝染病を念頭に置いた対応であるものと示唆された。